オンライン台湾華語の試み

野田 善弘*

An attempt of Online Taiwan Mandarin

Yoshihiro NODA*

This paper is a practical report that introduces Online Taiwan Mandarin into the class. Covid19 has raged all over the world, leading to the suspension of international exchanges. Under these circumstances, Kosen faced a difficult problem of how to promote the globalization of students. The way to overcome this situation is online international exchange using ICT. This report explains the background of this initiative, the actual classes and their effects, in addition, discusses how to make use of this experience after the end of Covid-19.

１　はじめに

新居浜工業高等専門学校（以下、本校と称する）では、2016年度以降、台湾國立聯合大学華語文学系の学生（以下、実習生という）２名を約１か月間受け入れ、中国語の教育実習を行ってきた。この取組は、本校にとって短期留学生を受け入れた初めての体験であり、本校学生に対して今までにない国際交流の機会を与えた点で、本校のグローバル化推進に大いに貢献したと考えている。本校の学生が日本語の話せない海外の学生と接触して異文化コミュニケーションを体験し、英語の必要性を実感するとともに、これをきっかけに海外留学に挑戦する動きもあらわれた。[1]

さらにこれに加えて、実習生は本校学生の主体的な授業参加を促すために、授業方法に工夫を凝らして様々な仕掛けをつくる。毎回、ゲーム的要素を取り入れるなど、主体的な学びを生み出すアクティブ・ラーニングを展開し、本校学生たちも新鮮な気持ちで参加している。筆者もその影響を受けて、自ら授業改善に取り組み、AL 型授業を考案し、実習生とともに実施する取組を続けており、国立聯合大学との提携による実習生受け入れは、筆者および本校の中国語教育の改善にも大いに役立っている。[2]

しかしながら、Covid-19 の影響によって 2020～2022 年度は実習生の受け入れを中止せざるを得ない状況に至った。「生身」の国際交流が不可能となった今、今まで積み上げてきた交流体験を継続するには、Covid-19 によって培われた遠隔授業のスキルを活用した、ネットを介してのオンライン交流のほかにない。そこで、筆者が所属する高専中国理解・中国語教育研究会の中でその可能性を検討し、2020 年は 11 月ごろから課外でオンライン中国語を企画し、希望者に受講してもらった。聯合大学の学生と高専の学生が１対１で Microsoft Teams の会議機能などを用いて、聯合大学の学生が作成した教材を共有し、中国語の発音や基礎的な会話を学習した。

筆者はこの取組を発展させて、2021 年度は中国語の授業の中にこのオンライン授業を取り込み、本校学生に同世代の海外学生と交流する機会を提供したいと考えた。これは聯合大学華語文学系の教育実習の代替措置として聯合大学側にもメリットがあり、双方に有効な取組である。2020 年度に実施した課外で行う授業は、単位認定がないため、学習者のモチベーションを継続することが難しい。しかしながら、正課であれば、本校学生に単位を認定できるので、学生の意識も当然異なり、継続は容易となる。授業担当者が一定の枠組をつくり、管理することもできる。本稿は、オンライン授業（台湾ではこれを「線上教学」と呼ぶ）を正課の講義の中に導入した、一つの授業改善の試みについて報告するものである。

また、今回の試みの特筆すべき点は、中国語の授業で「台湾華語」を扱ったことにある。オンライン授業の実際を報告する前に「台湾華語」の授業を導入した経緯について述べておこう。

令和 4 年 9 月 30 日受付（Received Sep.30,2022）

* 新居浜工業高等専門学校一般教養科（Department of Human Science, National Institute of Technology(KOSEN), Niihama, 792-8580, Japan）

２．「台湾華語」授業の開設

本校では第２外国語としてドイツ語と中国語が設けられている。４年次でどちらかを必ず選択することになっていて、初級中国語（通年２単位の履修単位科目）を学年の約半数100名程度が受講する。５年次には中級中国語が通年２単位（履修単位科目）で開設されていて、中国語選択者100名中、40名程度が選択し、２年間にわたって中国語を学ぶ機会を設けている。これが2020年度までのカリキュラムである。

しかしながら、2021年度から５年次のカリキュラム変更がなされ、中級中国語が通年２単位の履修単位科目から後期２単位の学修単位科目に変更された。その際、５年前期に自由選択科目「中国語会話」を新設することになった。高専の全体的傾向として、第２外国語は削減傾向にあるようだが、本校では５年前期に自由選択科目「独語会話」が以前から開設されていたため、科目のバランスの面から新規科目「中国語会話」の開講が認められたのである。

旧カリキュラム

	前期	後期
５年	中級中国語（履修単位）	
４年	初級中国語（履修単位）	

⇩

新カリキュラム

	前期	後期
５年	中国語会話（履修単位）	中級中国語(学修単位)
４年	初級中国語（履修単位）	

このカリキュラム変更によって、「中国語会話」の授業内容について考えなければならなくなった。

2020年度までは、４年次の初級中国語を筆者（日本人）が担当して中国語の基礎を教え、そのうえで５年次の中級中国語を中国人ネイティブ（非常勤講師）に担当してもらい、「話す」と「聴く」に重点を置いた授業を行ってきた。外国人教師に接する機会を学生に提供することは効果的であり、学修単位化によって接する時間が半減することは望ましい状況ではないと筆者は考える。本校においては、2022年度に常勤で外国籍教員１名を雇用するまでは、外国籍の教員は学内全体で非常勤講師が数名のみという状況で、これは学生のグローバル意識が育たない一つの要因とも考えられる。筆者は、そのような本校の現状を改善するために台湾國立聯合大学との交流を強化し、中国語教育実習生の受入を推進してきた。

台湾の実習生を当てにして、外国籍教員の不足を補い、「中国語会話」の授業を組み立てるとしたら、どのような授業が望ましいか。そこで、実習生がその能力を存分に活かせるように、「台湾華語＝台湾で通用する中国語」の授業に思い至ったのである。そのほかにも理由はいくつかある。たとえば、

・台湾には親日国という良いイメージがある。
・対照的に中国大陸に対して嫌悪感をもつ学生が多い。
・台湾の大学と相互交流ができている。
・台湾と大陸の中国語の違いが知れる。

台湾と中国大陸に対する日本人のイメージを比べてみたとき、中国への興味は、歴史（とくに三国志）であり、台湾はおいしい食べ物と、とらえ方に若干の違いがある。特に近年、タピオカブームがあり、最近では台湾カステラやルーローハンなど、台湾の食べ物がクローズアップされることが多く、台湾が身近に感じられている。愛媛県の状況を見ても、2019年に松山空港に台湾便が就航し、愛媛松山駅と台北松山駅が姉妹駅の協定を結ぶなど近年交流もさかんである。聯合大学実習生の受入のみならず、Covid-19が拡大する以前は、台湾の大学、国立聯合大学と文藻外語大学に本校学生を派遣することも行ってきたので、この相互交流によって本校学生にとっても台湾は身近な存在となっている。

「台湾華語」を授業に取り上げれば、同じ中国語でも地域によって違いがあるという事実を体験することができる。簡体字と繁体字の漢字の違い、ピンインと注音符号（ボポモフォ）の発音記号の違い、その他、モノの呼称も異なる場合が多い。自転車は大陸では「自行車（自行车）」であるが、台湾では「脚踏車」と言うなど、使用する単語が異なることが多くある。もちろん台湾でも「自行車」で通じるのであるが、やはり所変われば、言い方も異なる。筆者は中国（大陸）の中国語に慣れていたため、始めて台湾へ行ったとき、かなり戸惑いを覚えた経験がある。台湾人から「トイレは『衛生間（卫生间）』とは言いません」と指導されたことを今も鮮烈に覚えている。同じ言語でも所変われば様々ということを知る、考えてみれば当たり前なことだが、これも貴重な体験かもしれない。

以上の理由から筆者は「台湾華語」に挑戦してみようと考えた。テキストについては、台湾の生活や文化に対する興味を受講者に引き起こし、台湾を旅してみたいという思いを抱かせ、授業の後も学び続けたいという気持ちを持ってもらえるように、樂大維『台湾華語でぐるっと台湾めぐり』(白水社、2020年）を採用した。実習生は、ナイトマーケット（夜市）の紹介、有名な食物の紹介をいつも授業の中でしてくれるので、そのような観点からも実習生にとっても授業を組み立てやすいテキストと考えて選定した。

３．オンライン台湾華語の授業

3-1　準備

2021年度と2022年度の「中国語会話」の授業構成は、15回（１回は90分）の授業のうち９回を筆者が対面授業を行い、後半６回を聯合大学の学生によるオンライン授業とした。オンライン授業のツールは、本校学生が慣れているMicrosoft Teamsを使うこととした。以下の準備の過程について記述する。

５月中旬に遠隔授業が可能かどうか、聯合大学華語文学系の何修仁氏に問い合わせたところ、大学の定期試験が終了して休業期間に入った後、７月初旬から開始できるという返事をいただいた。実施に至る準備過程は以下の通りである。

５月中旬　華語文学系で実習生を募集
５月末　　実習生決定
　　教科書・シラバスを聯合大学に送付
６月中旬　小型 Web カメラの購入
　　本校学生の自己紹介を送付
　　実習生が自己紹介を送付
６月末　　何修仁氏がチーム分けを行う
　　実習生と本校学生が個別にやりとり準備
　　聯合大学がチームとチャネルを作成
７月初　　授業開始
８月初　　授業終了

2021 年度は、聯合大学華語文学系で「新居浜工業高等専門学校　線上（ONLINE）華語文実習」の募集を行い、６名が参加。教科書とシラバスを送って実習生たちに準備にとりかかってもらった。これが５月中に行ったことである。2022 年度も同じである。

2021 年度は、オンライン授業への参加を学内の演習室から行ったが、演習室のデスクトップ・パソコンには Web カメラがないため、本校学生の顔を映すためにはカメラを取りつける必要があり、小型の Web カメラを人数分購入した。また、ヘッドセットは各自準備するように指導した。ヘッドセットについては当日忘れも起こると考え、３セットほどこちらで準備した。また、校内 LAN が繋がらないアクシデントなどを想定し、WIFI ルーターを１台借りた。以上が環境整備のための事前準備である。

2022 年度については、受講者２名で、いずれも寮生だったので、演習室ではなく、学寮の自室からオンライン授業に参加してもらうことにした。各自が自分のノートパソコンを使用するので、カメラやヘッドセットは必要なかった。

準備の過程において実習生と LINE グループを作成し授業に関して事前の意見交換を行った。本校学生には授業中に中国語の自己紹介を作成させ、実習生に送付した。自己紹介の中に Microsoft365 アカウントを書かせて、実習生と本校学生で通信できるようにした。通信がしやすいように先に作成した LINE グループに本校学生も加入させた。

何修仁氏がチーム分けを行い、2021 年度は実習生１名につき本校学生２名を配置、2022 年度については実習生１名について本校学生を１名配置した。一部の学生は LINE で授業が始まる前に交流を行っていた。授業開始前に実習生が Microsoft Teams にチームを作成、さらにグループごとにチャネルを作成。チーム作成の作業はすべて聯合大学実習生が行い、本校学生はゲストとして参加する方法をとった。何修仁氏と筆者は全てのチャネルにメンバー登録し、授業の状況を見られるようにした。

聯合大学の実習生に対しては、実習終了後に実習証明書（修了証）を発行することとした。2020 年度まで対面で行っていた実習において、最後に証明書を授与していたので、今回も同様に証明書を作製することとした。

3-2　実施状況

予定通り７月初から「線上（ONLINE）台湾華語」を始めることができた。本校の学生は、2020 年度から遠隔授業を経験していたが、ライブミーティング形式のオンライン授業には慣れていないため、2021 年度の初回は接続や設定で手間取ったところはある。自分のパソコンではなく演習室のパソコンを使用したこともその一因であろう。2022 年度については、各自自分のパソコンを使用したため接続などについては問題なかった。しかし、各自自室から行ったため、本校の学生が授業を忘れていたり、寝過ごしていたり、若干のトラブルは生じた。とはいえ、全体的に見れば、大きな問題は発生せず、無事に６回の授業を実施することができた。

オンライン台湾華語を実施するにあたって実習生には以下のことをお願いした。

⑴　１回の授業は 60 分程度で作成すること。

演習室で実施する場合、授業開始前に毎回パソコンに Web カメラやヘッドセットを接続したり、Teams を立ち上げたりするのに 10 分程度は必要で、通信上の問題も発生する恐れもある。授業時間は 90 分あるが、その中で始まりの 10 分は準備、残り時間の 20 分程度は授業の振り返りに当てた。筆者がオンライン授業の中で生じた疑問について質問を受けるなど、時間を有意義に使うことができた。2022 年度は、自室から自分のパソコンを使っての参加とし、演習室を使用しなかったため、始まりの準備時間は短縮できたが、同じく 60 分の授業とした。授業が終わった後に本校学生には当日のオンライン授業の振り返りを行い、毎回記録をつけてもらうこととした。授業後の残り時間はその作業に当てた。

⑵　発音記号はピンインを使うこと。

台湾では「ボポモフォ（注音符号）」を発音記号として使用するが、学生は前年にピンインを使って発音を練習しているので、今回の授業ではピンインを使用することをお願いした。

⑶　授業はレコーディングを行うこと。

レコーディングをすることで、授業を後から確認して参加者（実習生および本校学生）へのアドバイスも可能である。本校学生の出席確認、実習生の実習証明に関するエビデンスになるということで、これを実習生にお願いした。

実習生は、各自工夫を凝らしたスライド（PPT ファイル等）を作成し、画面共有して教えていた。スライドには、中国語だけではなく日本語・英語が併記されているものが多く、写真やイラストも多用されていた。工夫を凝らして丁寧に作製

された資料は、学生の理解を大いに助けるものであった。実習生は、中国語を教える際に日本語ができないため英語を使ってコミュニケーションをとるが、この英語を本校の学生がはじめはなかなか理解できず、Google 翻訳を画面に出してやりとりをしている場面もあった。最初は英語も通じず苦労していたが、本校の学生も回を重ねるごとになんとか対応できるようになっていき、最後の方は英語で話しかけることもできるようになった。

台湾華語の授業は語学力の向上だけでなく、台湾文化の理解も目指しているため、実習生は台湾各都市の観光地やご当地名物を写真や動画を用いて紹介していた。ほかにも自己紹介の仕方を教えたり、クイズを使ったり、さまざまな仕掛けと工夫を盛り込んで授業を行っていた。実習生の授業を覗き見しながら、筆者自身も台湾文化に対する深い理解を得ることができた。

3-3　評価

本校がこれまで感染拡大時に実施してきた遠隔授業はビデオ・オンデマンド型であったため、このようなリアルタイムで双方向的なオンラインレッスンは、ほとんどの学生が未体験であった。もっとも中国語会話を受講する５年生は、コロナ禍の就職活動でオンライン面接の経験はあったであろうが。

オンライン台湾華語を受講した学生の感想・コメントをここに示そう。これは、2021 年度に中国語会話を履修した学生 12 名の回答である。少数であるので、その意見をここにすべて記載する。

・資料と説明が興味深くわかりやすい。（６）
・満足度が高い（５）
・台湾の人と話せて楽しかった。（４）
・台湾へ行ってみたくなった。（３）
・LINE で繋がりをもてたのがよかった。（２）
・とてもよい経験になった。（２）
・授業だけでなく会話を楽しみたいと思った。（２）
・英語の勉強になった。
・英語は必須だと思った。
・英語でカバーしてくれた。
・最初はたいへんだったが、だんだん話せるようになった。
・英語による意思疎通が難しかった。（４）
・音量調節が難しかった。
・周囲の声が入るので聞こえづらかった。
・通信環境から音が聞こえにくいことが多々あった。
・中国語で返せないことが残念だった。

受講学生の多くは実習生の授業に満足していた。それは実習の様子を見ていても確かに感じられた。初回こそ疲労困憊、不安も感じたようだが、これは初対面の緊張にもよるもので、何修仁氏が LINE 上で実習生に指導を行い、２回目は格段にスムーズに流れた。３回目以降になると、お互いリラックスしたムードで笑い声が起きるようになり、打ち解けた様子が見えた。50 名定員の演習室で 12 名が同時に行うので、できるだけ距離を置いて着席させたが、周囲の声が入って聞こえづらかったのも頷ける。この点については環境を整える必要がある。2022 年度は、受講生がそれぞれ自室から参加したので、周囲の声を気にする必要はなく、集中して学習できたようである。

台湾の人と実際に話せたことが、とても楽しく、よい経験になったと本校学生は回答している。また、台湾へ行きたいという思いも強くなったようである。授業をしてくれた実習生とオンライン終了後も連絡をとり、長期休業中に台湾旅行を計画している学生もいれば、聯合大学での研修への参加を希望している学生もいる。台湾の学生と画面越しではあるがリアルタイムで触れ合うことができて、英語や中国語で「会話を楽しみたい」という気持ちも高まったようで、両校の学生同士の交流は、オンラインという制約はあったものの、ある程度は達成できたと思われる。コロナ禍において国際交流を継続できたことを評価したい。

４．今後の課題

本校学生の評価を見てわかるように、協定校と連携したオンライン授業を導入し、コロナ禍の中、画面越しとはいえ、国際交流の機会を提供できたことは、学生にとって「とてもよい経験」をもたらした。自由選択科目ということで、もともと中国語や台湾に興味がある学生が集まっていたが、台湾への興味・関心はいっそう拡がったようである。

2019 年度まで毎年行っていた、実習生２名が 40 人に対する対面授業と比べ、１名の実習生が１～２名の学生に教えるオンライン授業は「話す」機会が増え、一人ひとりの達成感が対面よりあがるはずである。本校学生が「満足度が高い」と答える理由はこの点にあるだろう。学生たちは誰しも多くの人の前で話すことを恥ずかしがるが、１対１、２対１であれば、人前で話す恥ずかしさを感じなくて済む。授業では発音を徹底して直されるが、失敗を重ねながら何度も発音をするので、回を重ねるごとに発音がよくなっていく様子も見られた。特に 2022 年度の１対１の個別レッスンについては、その点が顕著にあらわれた。この点も「高い満足度」につながっている。このようなことからオンライン個別レッスンのメリットは確かに大きい。

次年度（2023 年度）は、Covid-19 の収束を見込んで、オンラインではなく、対面の実習を再開する予定である。しかしながら、台湾華語の授業（中国語会話）においては、少人数で意欲のある学生が集まるという利点を活かして、実習生が来日する前にオンライン授業を数回実施して、双方の関係づくりをしておきたい。なぜなら、そのような関係づくりができれば、実習生も本校学生もお互いにリラックスして対面授業に入れて、より対面授業の効果が上がると考えられるからである。事前に SNS を活用して本校学生と実習生が交流をしておけば、実習生も日本での生活について不安を感じず、早めに馴染めるのではないか。Covid19 の収束後は、対面を基

本にしつつ、オンラインも取り込み、新たなハイブリッド型の授業形態を模索してみたい。

実習生と本校学生の英会話能力の差は大きく、双方苦労していた。対面ならなんとなく伝わるものもあるが、画面越しでは、より「意思疎通は難しかった」と思われる。オンライン学習の継続が困難となる第一の要因はこの点にあるだろう。授業（正課）の中にオンライン学習を導入することによって学生たちはあきらめず継続できたが、課外だと初回で躓いて続かないことも起こりうる。時間が決められた授業の中にオンライン授業を導入するメリットは大きい。最初は苦しいかもしれないが、しばらく続ければ、「英語は必須だ」ということを実感でき、また、「最初は大変だったが、だんだんはなせるようにな」ったという、言語が異なっても意思の疎通は可能であるということを体験できれば、外国人と関わることに対する抵抗感を軽減することにもなるだろう。多くの学生が「とてもよい経験になった」と答えたように、なによりも同世代の外国人との交流という「経験」は、「台湾華語」が身についたかどうかは別として、本校学生の今後において大きな意義があるのではないだろうか。

「授業だけではなく会話を楽しみたい」という声は、台湾の同世代の人に興味をもってより深く交流したいという欲求の現れであり、その点では肯定的にとらえるべきものであるが、オンライン授業が実習生からの一方的な教授に終始していたという一面があるのは事実であり、改善すべき点である。もっとも「会話を楽し」むためには、共通のテーマが必要であり、英会話・中国語会話能力のある程度のレベルも求められるため、双方向的な「会話」は難しい。しかしながら、2022年度の本校学生の実習記録を読むと、双方の趣味（K-POP）の話題で盛り上がったとあり、「会話を楽し」むこともできたようである。学生たちは事前にLINEの交換もしているので、このオンライン授業をきっかけに仲良くなって、交流を続けている学生もいる。この授業がきっかけになって、Covid19 収束後、本校の学生が台湾を、実習生が日本を訪れ、交流を続けていくことを期待したい。

５．おわりに

2020～2022 年度は、Covid-19 の感染拡大によってこれまで実施してきた聯合大学実習生の１か月間の受入と対面実習を断念せざるを得ず、2021 と 2022 年度はやむなくオンラインという形で実習を実現させた。2023 年度、対面実習が可能になったとしても、中国語会話の授業においては、受講者が少人数であるメリットを活かし、対面実習の前にオンライン実習も実施してみたい。また、実習生が台湾に帰国した後も、相互で連絡をとりあって、引き続きオンラインで中国語を学んだり、交流を続けたりすることも可能である。

すでに述べたように本校では、台湾の国立聯合大学や文藻外語大学へ学生を派遣しているので、その派遣学生の事前研修としてオンライン中国語を聯合大学にお願いして実施することも可能であろう。本校学生が、オンラインで繋がった聯合大学の学生と台湾で再会して交流をさらに深めることも期待できる。本稿では、オンライン授業のメリットを強調してきたが、やはり国際交流は対面交流を基本とすべきである。現地の空気を吸ってこそ体験できるものは数多くある。今後も聯合大学との提携を強化し、本校学生の国際交流の機会を確保するとともに、世界へ出たいという留学の機運も醸成していきたいと考える。

筆者は中国留学の体験はあるが、台湾については経験が浅く、「台湾華語」および台湾文化に関する授業は難しかった。幸いなことに最近は台湾を紹介する動画も多数あり手軽に視聴できるので、自らの経験不足を補いつつ、なんとか前半９回分の授業を成立させた。後半６回分を実習生の授業および交流に切り替え、目先を変えたことで、筆者もぼろを出さずに済み、本校学生も飽きることなく、授業参加へのモチベーションも維持できたと思われる。この取組は、筆者にとってもたいへん「よい経験」になった。

中国語会話（台湾華語）は自由選択科目であることから、受講生は中国語と台湾に興味を持っている学生ばかりで、みなが主体的に参加してくれた。途中でドロップアウトする学生も一人もいなかった。最後まで学習にしっかり取り組んだ本校の受講生を褒めたたえたい。

また、聯合大学華語文学系の学生たちが、夏休みを一部返上して熱心に取り組み、言語の壁を様々工夫しながら乗り越え、粘り強く教えてくれたことに対して、深く感謝の意を表したい。

最後になりましたが、筆者のオンライン台湾華語の授業にご協力をいただいた国立聯合大学華語文学系の何修仁氏に謝意を表します。

参考文献

[1] 野田善弘：「台湾国立聯合大学短期実習生と協働した授業実践―新居浜工業高等専門学校のグローバル化に向けて―」、新居浜工業高等専門学校紀要第 55 巻、pp. 45-50、(2019)

[2] 野田善弘：「中国語・国際理解の授業におけるＡＬ型授業の試み」、新居浜工業高等専門学校紀要第 57 巻、pp. 43-48、(2021)

附記

本稿は、日本学術振興会・科学研究費補助金のうち基盤研究（Ｃ・一般）「理系学生用オリジナル中国語教科書に即したアクティブラーニングの開発及び事例集作成」（課題番号：18K00818 研究代表者：畑村学）、および「高専間・海外協定校連携による『ハイブリッド型中国語学習システム』の構築」（課題番号：21K00780 研究代表者：畑村学）の助成による研究成果の一部である。